

2012 年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

E	文学部	身分	教授
氏名	関 礼子		
NAME	SEKI Reiko		

1. 研究課題

(和文) 泉鏡花「歌行燈」の上演性ー交差する文学・演劇・映画ー

(英文) The Performativity in "Uta-andon" ( The Town lantern ) by Izumi Kyoka

: Crossing the literature, the theater and the cinema

2. 研究期間

1 年間

3. 研究の概要 (背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 50word 程度)

(和文)

本論は泉鏡花の「歌行燈」(『新小説』1910年1月初出)を、その後に演劇化・映画化されるまでの変容を跡付けながら、小説・演劇・映画のそれぞれにおいてどのように「上演性」が実践されているかを考察した。ここでいう「上演性」とはJ・バトラーの performativity に基づき、一つの体系による様式性を継承しながらも、演じる者によって新たな意味が生み出されることを意味する。

周知のように鏡花はその作家としての出発いらい、新派演劇がその跡を追うように原作を脚色して演じてきた。ある時点からは鏡花自身が役者の求めに応じて「かきぬき」という上演台本の科白を提供するなどの試みを行い、文字通り文学と演劇は相補的關係をもっていた。「歌行燈」の新派演劇による初演はテキストの初出から30年後、鏡花の死の翌1940年に久保田万太郎脚本によって為され、さらに映画化はそれから三年後の1943年に成瀬巳喜男監督によって行われた。このように多くの時間が費やされたのは、原作の謡曲に基づく芸術的様式性と近世の滑稽文学や博多節などが織り成す大衆の様式性が融合する世界を演劇化することが困難だったからにほかならない。しかし新派演劇と提携した映画では、俳優たちがその身体に継承された「芸」の力によってこのテキストが持っている「上演性」をみごとに実践している。その意味でこの映画は文学・演劇・映画が交差する得難いテキストになっているといえる。

本研究では、以上のような「歌行燈」の上演性を具体的に明らかにすることができたといえる。

(英文)

The purpose of this study is to analyze in theoretical framework of "performativity", how " Uta-andon" ( The Townlantern ) written by Izumi Kyoka (1910) was adapted to the theatrical play(1940) and then to the film directed by Naruse Mikio(1943). By doing so it will become cler what new interpretations were in each aadptatio.

4. おもな発表論文等（予定を含む）

<p>【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）</p> <p>関 礼 子： 泉鏡花「歌行燈」の上演性—交差する文学・演劇・映画—</p> <p>中央大学文学部『紀要』（言語・文学・文化）2014年3月予定</p> <p>査読:無。なお巻号・頁等は未定</p>
<p>【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）</p>
<p>【図 書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）</p>
<p>【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）</p>